

みんなで描くみんなの未来プロジェクト

大学生と経営者をつなぐテラス

「未来とのダイアログ」

10月29日開催

10月29日の夜、公立中学校の校舎をリノベーションしたアート施設で、経済同友会は大学生と経営者をつなぐイベント「未来とのダイアログ」を開催。当日はトークセッションと、経営者を囲むワイガヤセッションとの2部構成で行われ、大学生30人が参加した。



協力: ビズリーチ・キャンパス

キャリアや仕事観をテーマに 本音で対話

「未来とのダイアログ」は、経済同友会が会員の枠を超え、社会のさまざまなステークホルダーと議論・対話・連携する「みんなで描くみんなの未来プロジェクト」の一環として開催した。今回は、次世代層へのアプローチとして、大学1、2年生を対象とした。

冒頭、挨拶に立った横尾敬介副代表幹事・専務理事は、経済同友会の成り立ちや設立精神、現在の活動状況について説明した上で、「経営者から見て大学生は、日本の未来を託す人です。これから社会に出る皆さんから見たら、経営者は未来の自分の姿かもしれません。就活という入り口だけにとらわれず、仕事を通じて自分がどうなりたいのか、社会に出てからの長い人生を考えるために、今日の機会を活用してください」と述べた。



第1部トークセッションでは、秋池玲子副代表幹事、志岐隆史幹事、島崎豊氏と、ファシリテーターの法政大学キャリアデザイン学部 田中研之輔教授が登壇し、「学生時代の思い出と自己紹介」という身近な話題からスタートした。学生生活や部活、アルバイトの思い出をそれぞれが語ったあと、キャリアの変遷や仕事観へと話は展開した。

田中教授からの「大学時代に今の自分を思い描いていたか」という問いに対して、秋池副代表幹事は「皆さんと同じように、自分の将来はどうなるんだろう、これから何をしたらよいだろうかと思うことはありました」と参加者の気持ちに寄り添いつつ、「今の自分の姿はまったく見えていなかったのですが、あのころおぼろげに思っていた『社会の役に立ちたい』ということが、結果的に今につながっているような気がしています」と述べた。志岐幹事は「就職前のイメージと実際の仕事では、随分ギャップがありました。同じ会社にいても、私自身は異動のたびに新しい挑戦ができましたし、失敗もありました。その積み重ねを経て成長し、今があると思っています」と振り返った。島崎氏は「学生時代から、海外で仕事がしたいという思いを持っておりました。海外出張や駐在する機会もある総合商社を選び、実際にその機会に恵まれました。やりたいことがあるなら『絶

対に、いつかできる』と心の中に思い続けておくことが大事だと思います」と語った。

経営者の言葉で語られる経験談に 身を引き出す大学生

後半は、参加者からの質問を中心に進行。次々に手が挙がり、「大学時代にやっておけばよかったと思うこと」「やっておいてよかったこと」や、理系学生からの「経営者として技術者に求めていることは何か」といった学業につながる質問、あるいは「どういう人間でありたいと思っているか」という大きなテーマまで、幅広く寄せられた。

中でも「人生で一番つらいときをどう乗り越えたか」という問いに対しては、「それを乗り越えない限り自分の気持ちは収まらないし、解決もしないので、とことん考え抜きます」(秋池副代表幹事)、「本当につらいときはあまり遠くを見ずに、今困っていること、足元のテーマだけを徹底して考えるようにしています」(志岐幹事)、「一人で抱えても乗り越えられないことが多いので、関係者に率直に相談し、また動きながら考えることで解決の道筋が見えてきます」(島崎氏)といった発言があり、3氏の経験を基に発せられる言葉に、参加者は深くうなずき、聞き入っていた。

最後に田中教授が「社会に出ると、今よりもっとリアルなやり取りが大事

になっていきます。経営者と本音で話せる今日の場合は、皆さんの財産になるはずです」と締めくり、登壇者への拍手をもって第1部は終了。リラックスした雰囲気のまま、第2部へと進んだ。

「働くこと」のイメージが深まったワイガヤセッション

第2部は経営者が3テーブルに分かれて着席し、食事を囲みながら学生との直接対話形式で進行。「何でも質問に答えます」と経営者が発言したことで、カジュアルに会話をできる雰囲気が増し、活発な質疑応答が行われた。実際にどういう仕事をしているのか、どういうキャリアを歩んできたかなど、具体的な話を聞きたいという声が多く、各テーブルで経営者が経験を惜しみなく伝えていた。

例えば「キャリアはどうつくるのがよいのでしょうか」と悩む学生に対して、「チャンスは予測できないことが多いので、自分にとっていいと思う選択をした上で、目の前の仕事を精一杯や

るようにしています。そうすれば必ず次の道が開けると思っています」(秋池副

代表幹事)と仕事への前向きな姿勢が語られた。「やりたいことは明確にすべきでしょうか」という質問には、「それもちろん大事ですが、会社の中にはたくさん仕事があります。固執し過ぎずに視野を広げることも重要です」(志岐幹事)といったアドバイスがあった。「仕事で大事にしてきたことは何ですか」と問われ、「自分がやりたいことを仕掛ける能動的な姿勢です。そうすると仕事がかげん面白くなります」(島崎氏)と、主体性を持つことの重要性が述べられた。「留年して海外留学をしたいが、両親からは就職時に年齢が不利にならないか心配されている」という学生の発言に、「人生100年と言われる中で、学生時代の1、2年などほんの瞬間。卒業が延びても就職になんのハンディもない。迷わず挑戦してほしい」



(横尾副代表幹事・専務理事)といった会話が交わされ、学生を勇気づける一幕もあった。

1時間のワイガヤセッションはあっという間に過ぎ、最後に集合写真を撮ってイベントは盛況裡に終了した。終了後のアンケートでは「仕事の苦勞や喜びを聞くことができ、仕事に対するイメージが具体化された」「キャリアに対する経営者の考えの深さに感銘を受けた」「体験を通して語られた言葉がとても勉強になった」といった声が寄せられ、「仕事と人生」を深く考える機会になったことがうかがえる。経済同友会の財産である経営者一人ひとりの経験と魅力を伝える機会として大きな手応えを得た今回のイベントは、今後の「みんなで描くみんなの未来プロジェクト」にも活かされる予定だ。

登壇者プロフィール (敬称略・登壇順)

(役職は開催当時)



横尾 敬介
(よこお・けいすけ)

経済同友会
副代表幹事・専務理事



秋池 玲子
(あきいけ・れいこ)

ボストンコンサルティンググループ
シニア・パートナー&
マネージング・ディレクター



志岐 隆史
(しき・たかし)

全日本空輸
取締役副社長執行役員



島崎 豊
(しまざき・ゆたか)

丸紅 執行役員
秘書部長 広報部長



田中 研之輔
(たなか・けんのすけ)

法政大学キャリアデザイン学部
教授(博士:社会学)

福岡県生まれ。1974年慶應義塾大学商学部卒業後、日本興業銀行(現みずほ銀行)入行、ニューヨーク支店調査役、システム管理部参事役、名古屋支店長などを経て、2007年にみずほ証券取締役社長、11年取締役会長。2004年4月経済同友会入会、15年度より現職。

群馬県生まれ。1990年早稲田大学理工学大学院修士課程修了。キリンビール、マツキンゼー・アンド・カンパニー、産業再生機構を経て現職。産業再生機構では、全初となる路線バス会社再生の実務に当たる。米国MIT経営学修士。2005年9月経済同友会入会、18年度より副代表幹事。

長崎県生まれ。1980年慶應義塾大学経済学部卒業後、全日本空輸入社。主に営業部門・人事部門の業務に従事し、人事部長・営業センター長・ANAセールス社長を経て、2017年より現職。2012年4月経済同友会入会、16年度より幹事。

東京都生まれ。1982年慶應義塾大学経済学部卒業後、丸紅入社。海外インフラビジネスに従事し中東、アジアに駐在。会長秘書、環境インフラプロジェクト部副部長、広報部副部長などを経て2016年より現職。慶應義塾大学リーディング大学院特任教授、筑波大学客員教授、日本秘書協会理事。2017年7月経済同友会入会。

一橋大学大学院を修了し、メルボルン大学、カリフォルニア大学バークレー校で客員研究員を務める。専門はライフキャリア論、社会学。『先生は教えてくれない就活のトリセツ』他、著書18冊。取締役、企業顧問を歴任。大学と企業をくつなぐオリジナルな企画を多数手掛ける。